

子どもたちが多様な文化に気付き、受けとめる力を 育てる総合的な学習の時間における授業の工夫 —第5学年国際理解教育の取り組みを通して—

広島市立真亀小学校教諭 平松嘉浩

研究の要約

在籍校においても近年外国からの転居者も増え、転入児童も増加している。国際理解教育の必要性を強く感じる中、学校全体での取り組みが必要になってきた。

『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』には、「世界中には多様な考え方や価値が存在することを実感できるような場面、それを解決する方法を考えたり、討論したりする学習を設ける」とある。この内容を踏まえて、国際理解教育が目指す「異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、自分の考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力を育てる」ために、参加型学習を取り入れ、教科や行事等の関連を図った総合的な学習の時間の授業の工夫を第5学年で研究する。

キーワード：国際理解教育、総合的な学習の時間、国際理解、
参加型学習、ワークショップ

I 問題の所在

在籍校においても近年外国からの転居者も増え、転入児童も増加している。国際理解教育の必要性を強く感じる中、学校全体での取り組みが必要になってきた。

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』によると、「グローバル化が一層進む中で、横断的・総合的な課題として国際理解を扱い、問題の解決や探究活動を通して取り組んでいくことは、意義のあることである。その際には、広く様々な国や地域を視野に入れ、外国の生活や文化を体験し慣れ親しむことや、衣食住といった日常生活の視点から、日本との文化の違いやその背景について調査したり追究したりすることが重要である。」「また、日本と諸外国との関係について学ぶ際に、例えば地球温暖化や食料の輸出入の問題のように、価値が対立する問題に出会うことがある。そのような問題を積極的に生かして、世界中には多様な考え方や価値が存在することを実感できるような場面を設定することも考えられる。また、それを解決する方法を考えたり、議論したりする学習を通して、国際間の協調の重要性や難しさについて、考える機会を設けることも想定できる。」¹⁾

と述べられている。このような状況を踏まえ、これからの国際理解教育の必要性を強く感じる中、教科や行事等の関連を図った、学校全体での取り組みが必要になってきた。

II 研究の目的

総合的な学習の時間の単元の展開では、「世界中には多様な考え方や価値が存在することを実感できるような場面を設定すること」²⁾とあることを踏

まえて、外国の文化の違いを探究し、平和記念公園で外国の方と交流する学習活動を計画した。

「異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、自分の考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力を身に付けることができるようにすべきである」³⁾と述べてあることから、外国文化の多様性に気付き、違いを受けとめるとともに、大切にしていこうとする児童を育成するために、教科や行事等の関連を考え、参加型学習やワークショップを取り入れた第5学年の授業の工夫を研究することとする。

III 研究の方法

総合的な学習の時間において、子どもたちが多様な文化に気付き、受けとめる力を育てるための授業の工夫を第5学年国際理解教育の取り組みを通して研究授業を行い、その結果について考察しまとめる。

IV 研究の内容

1 国際理解教育について

国際社会で求められる態度・能力について、『初等中等教育における国際教育推進検討会報告』によると、「国際化した社会において、我が国の子どもたちが自立した個人として、いきいきと活躍できるよう、初等中等教育段階においては、すべての子どもたちが、異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、自分

1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 東洋出版 2008年

2) 文部科学省『初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～』 東洋出版 2005年

3) 上掲書2)

の考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力、を身に付けることができるようにすべきであると考え。多様な人々との日常的な交流が拡大する中にあるのは、異文化や異なる文化をもつ人々を理解するだけでなく、理解した上で、それらを受容しながら共生することのできる力が重要となる。」⁴⁾と述べられている。そこで自分を見つめ直し、お互いの自分らしさ(ここでは自分の文化と呼ぶ)を受け入れ、次に多様な異文化(生活・習慣・価値)と自分の文化を比べることによって、それらの多様な文化に「気付かせ」、違いを違いとして認識し認めようとする「受けとめる」力を育てようと考えた。これは、自分なりの判断基準をもち、国際化した社会の中で生きる個人としての価値観を形成していく基礎になると思ったからである。また、「他者とのかかわりを通して問題を解決し、葛藤や対立を乗り越えてよりよい人間関係を作り出そうとする態度や能力」⁵⁾は国際教育が目指す態度・能力の基礎になると考える。本研究では、このような力を育成するため参加型学習を授業に取り入れることとした。参加型学習については先行事例によると、「学習過程で教師と学習者が対話を行い、身近な事柄を学習者が問題化し、それを教師と学習者がともに学び、必要があれば教師は学習者の問題発掘・認識をより意味のあるものとするため、きっかけづくりを行うのである。」また、「参加・体験・ネットワーク・対話・問題解決・社会的行動といった言葉で特徴付けられる学習形態は、ロールプレイやシミュレーションといった心理学の理論を応用したゲームやアクティビティを基本とし、学習者主体の活動を学習の中心に据えた教育方法である。」と⁶⁾述べてある。このことから異文化体験の少ない教師が国際理解教育を進めるに当たって、教師と学習者がともに学び合いながら進めていこうとする参加型学習は、有用な手だての一つではないかと考える。さらに、子どもた

ち自らが気付き、受けとめ、判断するといった3つの学習活動を計画することで、つながりのあるねらいをもたせた学習プロセスを構成することで広がりや深まりをもった学習を展開していこうと考えた。

2 総合的な学習の時間の

年間指導計画と評価

本研究では、他教科や行事等との関連を図った、第5学年の総合的な学習の時間の年間指導計画を作成した。(表1)そして、育てたい子ども像や『学習指導要領解説 総合的な学習の時間』の目標から、評価規準を作成し、みつける(課題発見力)・とらえる(ものの考え方)・かかわる(課題解決力)・ふりかえる(生き方を考える力)の4つとし、この中に「外国について知ろう」と題した中単元を設定した。そして3つの主な学習活動を計画し、それぞれ「気付く」「受けとめる」「判断する」といった、ねらいをもたせた授業の構成を考えた。

(1) 第5学年の総合的な学習の時間における年間テーマ

「ぼくらは小さな地球人。ぼくらにできることは何だろう」

(2) 単元設定の理由

高学年となった児童は、英語科の学習に意欲的に取り組む中で、外国に対する強い関心を持ち始めている。また外国籍の友達の増加などから、異文化理解が不可欠となってきている。そこで、外国の文化の違いを探究し、平和記念公園で外国の方と交流する学習活動を計画した。その学習活動を通して、外国の文化の多様性に気付き、違いを受けとめるとともに、大切にしていこうとする児童を育成していきたいと考え、本単元を構成した。

(3) 単元目標

○ 異文化を知り、自分を振り返り見つめ直す

4) 上掲書2)

5) 上掲書2)

6) 広島県教育センター『参加型学習を取り入れた国際理解教育に関する研究』2003年

ことで、他人を思いやり協同することが大切であることに気付く。

- 多様な文化や考えを知り、お互いに深い関心を持ち、尊重し合うとともに、違いを受け

とめ、自分の考えや思いが言えるようにする。

- 自分と地域社会とのかかわりを考えながら、自らかかわろうとする。

表1 第5学年 総合的な学習の時間年間指導計画

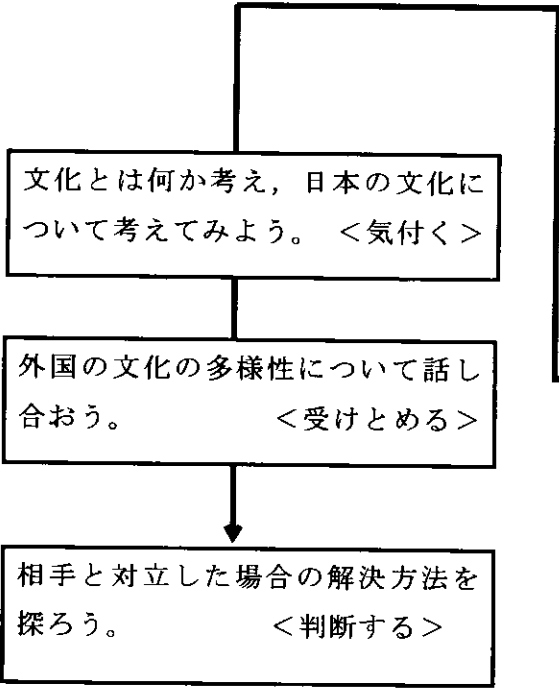
単元	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
総合的な学習の時間	①ぼくら小さな地球人	②外国について知ろう(1)	③外国について知ろう(2)	④外国について知ろう(3)	⑤外国について知ろう(4)	⑥外国について知ろう(5)	⑦外国について知ろう(6)	⑧外国について知ろう(7)	⑨外国について知ろう(8)	⑩外国について知ろう(9)	⑪外国について知ろう(10)	⑫外国について知ろう(11)	
国語	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜ライプスキル＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」
社会科	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」	＜社会科＞ 「自己紹介」 「自己紹介」 「自己紹介」
理科													
体育													
音楽													
美術													
外国語													
総合的な学習の時間	1年生を招く会	海外研修	外国の文化について話し合う会									運動会	

表2 総合的な学習の時間第5学年単元計画

- 単元名 ぼくら小さな地球人。ぼくらにできることは何だろうか？
- 単元設定の理由
 第5学年は、外国文化の多様性について学び、外国に対する関心を高め、外国の文化について話し合い、外国文化の多様性について話し合うことができるようにする。また、外国文化の多様性について話し合い、外国文化の多様性について話し合うことができるようにする。
- 単元目標
 ○ 異文化を知り、自分を振り返り見つめなおすことで、他人を思いやり協同することが大切であることに気付く。
 ○ 外国の文化の多様性について話し合い、外国文化の多様性について話し合うことができるようにする。
 ○ 自分と地域社会とのかかわりを考えながら、自らかかわろうとする。
- 単元の評価基準

（話し合い力）	（ものの考え力）	（表現力）	（学びの態度）
○ 話し合いの場をもち、自分の考えを述べることができる。	○ 物事を自分のこととしてとらえることができる。 ○ 思いを受け止めることができる。	○ 話の筋や内容がわかるように話すことができる。	○ 話し合いの場をもち、自分の考えを述べることができる。
- 単元の展開（全36時間）

主な学習活動	時	学習のねらい
ぼくら小さな地球人 ・クラスは小さな社会 ・どんな地球人になりたいかな	5	クラスは小さな社会であり、自分はクラスの一員でありまた地球人でもあることに気付かせる。 よりよい地球人になるために、知りたいこと、学びたいことを考えることができる。
外国について知ろう ・文化とは何か考え、日本の文化について考えよう。 ・外国の文化の多様性について話し合う。 ・相手との対立した場合の解決方法を探ろう。	10	自分自身や身のまわりにもいろいろな文化があることを知ることができる。 外国文化に対する「思い込み」「偏見」に気付かせ、それぞれの国の文化を理解しようとする意欲を持つことができる。 相手と対立する場を想定し、お互いが最も納得できるような解決方法の考え方を考えることができる。
外国の文化で外国の人と交流しよう ・私たちのこと(学校)を伝えよう ・外国の方と話し合おう、聞いてみよう	10	外国の人に、自分(学校)、地域の文化を伝える方法や内容を考えることができる。 アンケートをもらったインタビューしたりして興味を持って教材しようとする。
外国にできることは何だろうか？ ・外国の国の文化を調べてみよう ・調べたことをまとめてみよう	10	交流した人の国について、詳しく調べることができる。 調べたことをまとめることができる。 学習を通して、小さな地球人として、5年生の私たちにできることは何か考えることができる。



3 研究授業について

(1) 「外国について知ろう」

ア 題材名「わたしのまわりにある多様な文化」

(7) 本時のねらい

自分のまわりにも、いろいろな文化があることを知り、知らないうちに多様な文化と共生していることに気付くことができる。

(イ) 授業の工夫

自分のまわりにも、いろいろな文化があることを知り、知らないうちに多様な文化と共生していることに気付かせるために、児童が自ら参加し、グループの相互作用の中で学び合うワークショップを取り入れた授業を計画した。

図1に示した通り私の文化シートを用いて、自分のもつ文化を比較することにより、クラスの中の文化も多様であることに気付くことができるようにし、それぞれの文化が生まれた理由を考える学習とした。ここで、文化には様々な位置付けがあるが、哲学・芸術・科学・宗教というよりも、児童に身近な生活習慣や慣習を「自分たちの文化」ととらえて学習した。

わたしの文化シート		
あなたの持っている「文化」について質問します。 あてはまると思ったら「はい」、あてはまらないと思ったら「いいえ」に○をつけてください。		
1	正月やきには、しょうゆをかけることがある。	はい いいえ
2	腹、口をふくことはしないようにしている。	はい いいえ
3	ぬけた歯は歯槽や袋に投げる。	はい いいえ
4	ごはんのみそ汁をかけて食べることもある。	はい いいえ
5	プロ野球では各チームを一番応援している。	はい いいえ
6	鯖を刺身でよく食べる。	はい いいえ
7	犬とねこなら、犬が好き。	はい いいえ
8	和食(たちみ)より、洋食(ゆか、じゅうたん)の方が好き。	はい いいえ
9	お正月のおそうじには、みそ味である。	はい いいえ

図1 私の文化シート

(ウ) 児童の様子

児童たちは、友達と文化を比べることで、自分たちにはそれぞれ「自分の文化」があることに気付き、そして友達との違いを受けとめようとしていた。この授業において、児童は、「自分のまわりにも、いろいろな文化があることを知り、知らないうちに多様な文化と共生していることに気付くことができた」と考える。

イ 題材名「レヌカさんの学び」

(7) 本時のねらい

レヌカさんの異文化体験を通して、自分の中にある「思い込み」「偏見」に気付き、それぞれの国の文化を尊重しようとする意識をもつことができる。

(イ) 授業の工夫

登場人物のレヌカさんはネパール人の女性教師である。日本に研修中に感じた文化と、母国で感じている文化を知ることで、ねらいに迫りたいと考えた。児童が自ら参加し、グループの相互の学び合いを促すワークショップを取り入れた授業を計画した。

活動としてまず、図2のようなたくさんのカードを「レヌカさんが日本にいた時のことでしょうか、母国ネパールにいた時のことでしょうか？」という視点で仲間分けをさせる。そして、レヌカさんからの手紙から、その概念のとらえ方を知ることにより、文化の違いが生じる背景を理解し受けとめることができるように学習を進めていった。

(ウ) 児童の様子

児童は文化の違いに驚いたり、日本の文化をもう一度確かめたりして、文化が違っていても、それを受けとめようとしていたように思う。このことから、異文化について知ることによって、自分の中にある思い込みや偏見に気付き、それぞれの国の文化を尊重しようとする意識をもつことができたと考える。

レヌカさんがネパールにいた時
感じたネパール文化

朝ごはんは
必ず食べる。

子どもたちは
よく通刺をしてくる。

暑いカゼでも
仕事は休む。

学校に
おやつや飲み物を
持ってきて、
食べたり
飲んだりする子もいる。

ご飯を食べる前に
かならず手を洗う。

レヌカさんが日本にいた時
感じた日本文化

朝ごはんを
食べないこともある。

子どもたちは
めったに通刺は
しない。

暑いカゼなら
仕事に行く

学校では
同年齢の子どもが集まって
勉強する。

子どもたちは
手作りのおもちゃで
遊んでいることもある。

図2 レヌカさんの学びカード

ウ 題材名「2頭の馬」

(ア) 本時のねらい

対立する場面を想定し、お互いが最も納得できるような問題解決の方法を考えることができる。

(イ) 授業の工夫

この授業では、ワークショップやロールプレイの手法を取り入れた。このロールプレイは、対立場面の状況を明確にさせたり、問題解決への思考を深めさせたりするために、与えられた役柄（ロール）を演じ、主題に対する思考を深めさせたり、その後の話し合い活動の課題を明確にさせたりして、課題についての理解を一層深めようとする手法である。対立場面の状況を明確にさせたり、問題解決への思考を深めさせたりするために取り入れることとした。次に図3のような絵を使い、エサを食べたい2頭の馬が、ひもで結ばれている。馬はこの後どうなったかを考えさせ、2頭の馬の問題点に気づき、よりよい解決方法を見つけさせようとする問題解決の学習を行った。

(エ) 児童の様子

お互いが納得する解決方法を考えている児童が多くいた。また、相手を意識しながら、自分是我慢したり、譲ったりしようとする児童も多く見ら

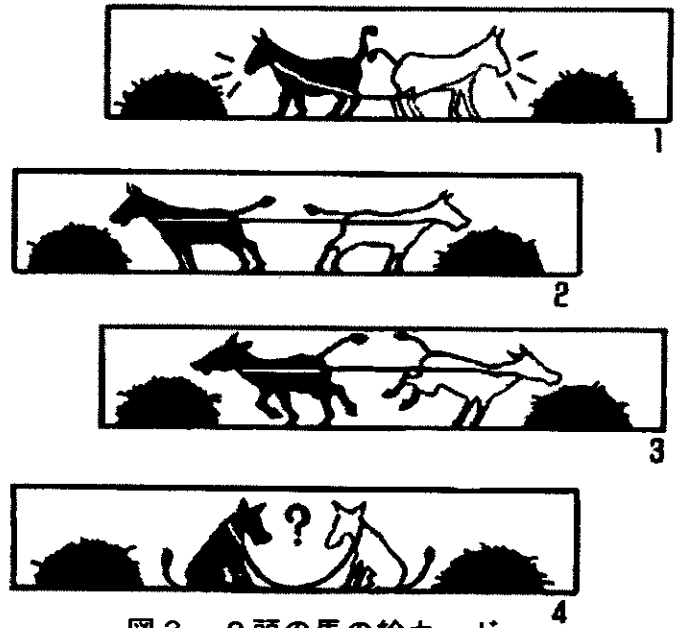


図3 2頭の馬の絵カード

れた。このように、対立場面でのお互いが納得する解決方法は、必ずしも自分が利益を受けるとは限らないが、相手を受けとめ、そして大切にしていこうとする態度は、国際理解教育の基盤となることから、今回の授業は、ねらいに迫る成果があったと考える。

V 研究のまとめ

1 研究授業を通して

以上の3つの授業を通してのA児の振り返りシートから、変容について考察する。

題材名「レヌカさんの学び」から、

「1人1人個性があることが心に残った。また、自分は自分の考えで生きていこうと思った。意見が違う人には、自分の考えを言いたい。」

と自分の文化に気づきながらも、自分を主張したいという思いが強く表れていた。

題材名「レヌカさんの学び」から、

「日本主婦は電化製品があるから楽。でもネパールの主婦は大変だと思った。野菜を選ぶときは、日本の文化で選ぶと思う。」

と異文化を理解しながらも、文化の違いを認めようとしているのか、自分の文化を主張しようとしているのかはよく分からなかった。

題材名「2頭の馬」から、

「3つの解決方法があり、2頭とも仲よく食べれるといいなと思った。一番いい解決方法を考えたい。独り占めや物を取るのをちょっとしていたので、もうやめて、ぎゃくにみんなですしずつ使いたい。」

と解決方法についてよく理解し、それを使おうとする姿勢がうかがえた。さらに、自己のこれまでを反省し、お互いが納得できる解決方法を選ぼうとする姿も見られた。これは、3つの主な学習活動をそれぞれ「気付く・受けとめる・判断する」といった、つながりのあるねらいをもたせた学習プロセスを構成することで深まりをもった学習となり、お互いを大切にしようとする姿が見られてきたのではないかと考える。

2 まとめ

これまで、外国文化の多様性に気付き、違いを受けとめるとともに、大切にしていこうとする児童を育成するために、参加型学習の手法を取り入れた授業の工夫を行ってきた。児童の発表や振り返りシートから、

- 多様な文化に気付くことができるようになった。
- 違いを認識し受けとめることができるようになった。

という2つの成果を見とることができた。

以上のことから、国際理解教育の目指す、「異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力」を育てることにも、一歩近付くことができたと考える。また、課題としては、本研究では研究授業を3時間に設定し取り組んできたが、年間を通した研究を進めていきたいと思う。さらに、今回5年生での研究となったが、他学年及び全校の取り組みについても研究を深めていきたいと思う。

最後に、私が日本人学校派遣での経験を国際理解教育に生かしたいと常々感じていたが、逆に異文化体験のない教師であっても国際理解教育を進

めるに当たって、教師と学習者がともに学び合いながら進めていこうとする参加型学習は、有用な手だての一つだと感じた。しかし、小学校における実践例は少なく、参加型学習をどのようなねらいをもたせて展開し、教科・領域においてどのように取り入れていくのかが重要であり、今後の研究の必要性を強く感じ、また今後の大きな課題として考えていきたいと思う。

参考文献

- ① 開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会『教室から地球へ—開発教育・国際理解教育虎の巻』東信堂 2006年
- ② 開発教育協会『開発ってなあに?』2005年
- ③ 多田孝志『ユニセフによる地球学習の手引き—新しい視点に立った国際理解教育(小学校)』教育出版 1997年
- ④ 土橋泰子『レヌカの学び—自分の中の異文化に出会う』あおもり開発教育研究会 開発教育を考える会
- ⑤ 日本ユニセフ協会『ユニセフの開発のための教育』ユニセフ 2003年
- ⑥ 広島県教育センター『参加型学習を取り入れた国際理解教育に関する研究』2003年
- ⑦ 文部科学省『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東洋出版 2008年
- ⑧ 文部科学省『初等中等教育における国際教育推進検討会報告—国際社会を生きる人材を育成するために—』東洋出版 2005年